

大学院生活を振り返って

愛知淑徳大学大学院文学研究科 第9期生 相川由美

大学院開設 25 周年を迎えるに当たり、そんなに経っただと思うと、感慨深いものがあります。その中で、私が在学しておりましたのは、前期・後期課程の5年間と、研究生だった1年間の計6年間ということになります。文学研究科英文学専攻が改組され、無くなってしまった現在でも、修了生の皆様方の尽力や協力のお陰で、細々とでも活動が続いておりますことに、この場を借りて感謝申し上げます。

思い起こせば、今から10年以上前、まだ2000年を迎えていない頃、私は院生としてこの大学院の門をくぐりました。右も左も分からない状況の中、入学した私を歓迎し、優しく接して下さった先輩方のことを今でも忘れることはできません。その中には終了、満期退学なさった先輩方も大勢おられました。研究への取り組み方、学会活動の事、論文の事、将来の事等、様々なことを惜しげもなくアドバイス下さいました。また、先輩方の活躍が励みになり、自分も努力しなければと思ったものです。このような環境のお陰で、今の自分があると言っても過言ではないほどです。

在学中最も忘れられないことは、やはり指導教授であった堀内俊和先生が突然お亡くなりになったことです。それは後期課程3年生になる直前のことでした。1週間前には、新学期からの研究や論文の計画等を先生とお話しておりましたので、まさかと思いました。堀内先生が亡くなったというショックと、これから自分はどうなるのだろうという不安で一杯でした。そんな中、当時主任であった池谷敏忠先生が「いつまでも泣いてはいけぬ。今自分のすべきことをしっかりやりなさい。」と叱咤して下さいました。本当に心強いお言葉で、我に返ることができました。その後も池谷先生からは数多くの叱咤激励をいただき、いつも有難く思っておりました。

そして、もう一つ忘れられないことがあります。前期課程2年生の時、授業中の私のプレゼンに「顔を洗って出直してきなさい。」とおっしゃった、松本青也先生のお言葉です。このお言葉は、今でも常に肝に銘じており、自分への戒めとしています。先生はお忘れだと思いますが、一生忘れることができない、私にとっては大切な言葉となりました。

今では、なんとか自立して研究ができるようになり、大学の授業でも専門ゼミを担当できるようになりましたが、これも大学院での様々な良き出会いのお陰であると思っております。そして、この出会いを後輩の皆さんにも繋いでいけたらと思っております。